



文禄・慶長の役の悲惨

徳川宗家十八代当主・静岡商工会議所最高顧問 徳川恒孝つねなかり



渡辺延一筆「加藤清正朝鮮ヨリ富士ヲ望ム」(明治26年)。
幕末以降、攘夷・異国退治の風潮が高まると、朝鮮の清州浦から富士山を望んだと伝えられる加藤清正を描いた錦絵が数多く版行された。

江戸時代に入る前に、後々まで日本の在り方に大きな影響を与えた事件がありました。文禄・慶長の役(一五九二―一五九八年)と呼ばれる朝鮮出兵です。

本能寺で信長が倒れた三年後の一五八五年、秀吉は関白の位を得て事実上の日本の支配者となりました。秀吉はその年に来日した朝鮮通信使と面談し、明国征服(征明)の通路にあたる朝鮮国が自分に恭順し、道案内として先頭に立つて明国へ進むことを要求しました。しかし朝鮮使はこれを拒否します。彼らは秀吉の日本統一を祝し、友好関係樹立を求めて来日した使節でした。

秀吉は一五九二年、肥前(佐賀県)名護屋に巨大な城郭を築城し、四月には総勢十五万八千人余の征明軍を進発させます。緒戦は圧倒的に日本軍が勝ちます。大

量の鉄砲の使用と、歴戦の将兵の力が朝鮮国軍を破り、大変な勢いで進軍しました。

朝鮮の宗主国である明国は援軍を派遣。この軍は、まだ日本にはなかった大砲をもっていました。

朝鮮各地では義軍が結成され、ゲリラ戦を展開。朝鮮半島の冬は寒く、米のとれない半島北部には食料がありません。補給路は長く伸びて兵站は難しく、李舜臣率いる朝鮮水軍は日本水軍を破り、補給はますます困難になります。

その中で、秀吉の命を受け渡朝して督戦に努める石田三成ら朝鮮奉行と、苦しい戦を続ける加藤、黒田、小西、鍋島、立花らの諸将とのあいだに確執が生まれます。さらに負け戦を演じた大名が秀吉の怒りを買ひ、改易される事件が起こります。進むも破滅、退くも破滅という構図が見えてき

たのです。後の関ヶ原の合戦で、これら第一線で戦った諸将の多くが、三成率いる西軍ではなく、家康率いる東軍に参加したのはこのためです。

明は和平交渉を行う使者を派遣しましたが、秀吉が明国王女を天皇の后として差し出すことを求めたため、決裂。その後、秀吉は三十万の軍勢を率いて渡朝することを計画しますが、家康と前田利家の反対にあいます。

秀吉の死去の後、利家と家康は全軍の引き上げを命じます。しかし、引き上げ軍は朝鮮水軍に叩かれ、さらに多くの命を失いました。相当数の日本将兵が朝鮮国に同化したという記録もあります。日本軍の戦死者は六万人を超え、この悲惨な記憶は、江戸時代に入ると、鎖国にむかう大きな要因となりました。